

## ■ 今日のお話

“仲間”は誰のためにあるのか？

↓

私（自分）の為

自分に不足しているところを補ってくれる

人材

それぞれの良さがあって仲間がいるということは素敵なことである

## ■ ユニバーサルプレコーション

ユニバーサルプレコーションとは、血液由来の病原体が医療従事者に伝播する危険性を減らすためにデザインされた、血液と体液防御策を普遍的（全ての患者）に実施する予防策であり、現在スタンダードプレコーション\*の一部にとって替わられている。

## ■ スタンダードプレコーション

米国疾病対策予防センター（CDC）が1996年に発表したガイドライン。病院内のすべての患者ケアに関する感染管理対策。標準予防策と感染経路別予防策の2つの方法から成り立つ。前者はすべての患者に適用される方法であり、後者は、感染力の強い重篤な病態を引き起こす疾患に対し、前者に適宜、追加し適用される。

患者ケアに際しては、患者の血液、体液、分泌液（除・涙と汗）、排泄物、傷のある皮膚、粘液などを感染性があるものとして取り扱い、さらに適切な手洗いを行う。血液などへの接触を予防するためマスク、ガウンなどを着用する、などの予防策をとることを勧告している。予防策は、患者治療、患者配置・搬送等に従事する全ての者に徹底すべきものである。1985年にCDCが発表したユニバーサル・プレコーション（Universal Precaution）をさらに進化させた感染管理対策である

## ■ 道具としてのスケーラーの管理と知識

### 《管理の方法》

#### ① 水に漬ける・水洗

【水に漬ける】使用後はそのまますぐに水に漬ける。

水は時々オーバーフローさせる。その上で手を洗うのも良い。

わざわざ手洗い用シンクに置いてある医院もある。

【水洗】 水に漬けておいたものをフェイスを中心に歯ブラシなどで丁寧に水洗する（薄めた中性洗剤を使う）

→ 水が大切

血液・体液の付着した器具などは血液が固まる前に水洗し消毒する

→ 具体的には深い洗いおけを用意し洗いおけに水を入れて少し水道の水を流すように

## ② 超音波による洗浄

## ③ 薬液消毒

薬液につける（刃物専用槽）

グルタラール製剤の場合は専用密封容器を使う（薬液ガスが出る）

**薬液の説明書を必ずよく読み希釈（濃度）をよく守る**

→ 衛生士はここら辺の意識が低い

分かっているのと出来ているのとでは違う

職場の改善も大切 いまの現状に満足しない

たくさん知識はあっても現場でどういう風に噛み砕いて実現できるかで現場に活用できるようになる

## ④ 乾燥

トレイの上にペーパータオルを敷いた上にスケーラーを並べる

（布タオルは刃が引っかかりやすいので良くない）

## ⑤ シャープニング

スケーラーは各歯科衛生士の専用にすること

## ⑥ 滅菌

オートクレーブ または ガス滅菌

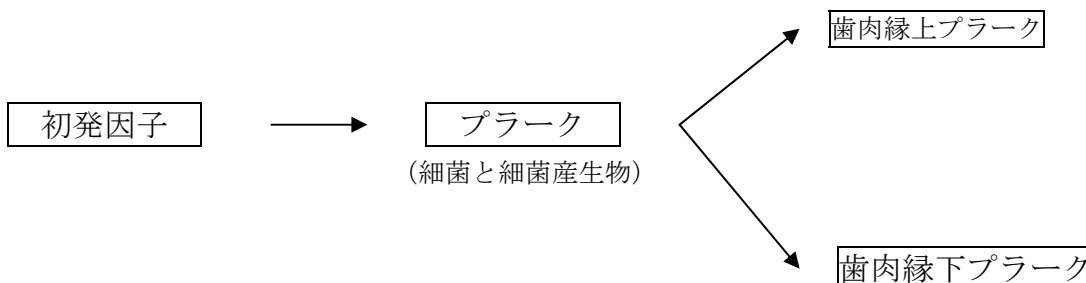
### 《保管方法》

カセットに入れてパック

パックのみ

紫外線消毒器にて保管

# 歯 周 疾 患 の 原 因



## 修飾因子

### 1) 局所性修飾因子

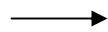
#### プラーク増加因子（炎症性修飾因子）

1. 食物の因子（自浄作用低下）
2. 口腔内環境因子(清掃困難＋自浄作用低下)  
歯石・う蝕・不良補綴物・口呼吸・歯列不正  
根分岐部病変・歯の解剖学的異常  
軟組織の形態異常・食片圧入
3. ポケット形成
4. 口腔内清掃の知識不足

#### 咬合性外傷（外傷修飾因子）

早期接触、ブラキシズム、舌・口唇の悪習慣

### 2) 全身性修飾因子



ホルモン、栄養、薬剤  
全身性疾患（血液疾患、糖尿病、免疫異常など）  
ストレス、年齢、洋食  
遺伝子性疾患（パピヨン・ルフェーブル症候群など）

（加藤 潤、最新歯周病学、医歯薬出版、1994）

## ■ SPT

Supportive Periodondal Therapy の略で、治療終了後も、日常の適切なブラッシング、歯科医院での定期的な歯垢（プラーク）や、歯石の除去、咬合調整などを行い、歯科医療従事者と患者の双方で、再発しやすい歯周病などを予防し、お口の健康を維持・推進していくこと。

## ■ シャーピングがなぜ大切なのか

シャーピングができていないスケーラーだと・・・

- ・ 歯石が取れない
- ・ 歯石の上を滑ってしまい歯石をバーニッシュする可能性がある
- ・ 縁下歯石を探查できない
- ・ 力のスケーリングとなり、術者にも患者にも負担をかける

## ■ SRP 開始時

レントゲン、ポケット数値の見直し

探査用プローベでまず探知 → どこにどのくらい付いているかをみて  
歯石のある部分にのみパワーをかける

**視覚** → ポケット内から出てくる血液、滲出液の変化

**聴覚** → 歯石を除去している時の量の変化

**触覚** → モデュファイドペンダラス法でスケーラーを持つことで、  
三本の指先に伝わってくる歯石の触覚

## ■ マネキン実習の前に・・・

～ポイント①～

**【手を作る】** ☆手のトレーニング

・スケーラーを使いこなすために必要なこと → 手ができること

### <指の輪>

一日3～5回、一日2分程度、指と指で丸い輪を作る。



指頭の真ん中をとらえる

拳の真ん中を窪ませる様にする（手の平が後ろから引っ張られているような感じで）

最初は軽くくっつけてぐっと力をいれてぱっとはなす

### <指たて伏せ>

1日につき5回程度でよい。

腕立て伏せの指バージョン。

10～15cmくらい壁から離れ、壁に指頭をたて（指はカーブさせる）

1～3秒くらいで元に戻す。

～ポイント②～

【体で覚える I】 ☆チェアーの機能を知る適正に使う（下半身の安定）

・治療椅子と術者用の椅子を知り適正に使う → 患者のポジションと術者のポジション

～ポイント③～

【刃が当たること】 ☆効率良く根面を極力傷つけずに歯石をとるテクニック

刃を当てるためには → 第一シャンクを歯軸と平行にする

第一シャンクを歯軸に平行にするには？ → まず、レストを動かさずに手の甲を返す

→ それが無理ならレスト（固定）を動かす

★ 第一シャンクが歯軸と平行になっているか常に確認する

（ハンドルの方向が変わることも確認）

＝理論より体（体感・感性）

～ポイント④～

【体で覚える II】 ☆テコの原理（指は動かない）

・モーション → 手・手首・腕の動作（肩・上半身の安定）

★ 指は動かない

作業点・・・ブレード

★ 手の甲の位置と動き

支点・・・レスト・左手

★ 手首の柔軟性

力点・・・手の甲から

★ 腕からの動き

★ リズミカルに（反動をつける）

☆ ロッキングモーション

① アウトサイドロッキングモーション

ニュートラルのポジションから手の甲を外側に揺らす（前腕の筋肉の外転を意識する）

② インサイドロッキングモーション

ニュートラルのポジションから手の甲を内側に揺らす（前腕の筋肉の内転を意識する）

③ インサイドツイストロッキングモーション

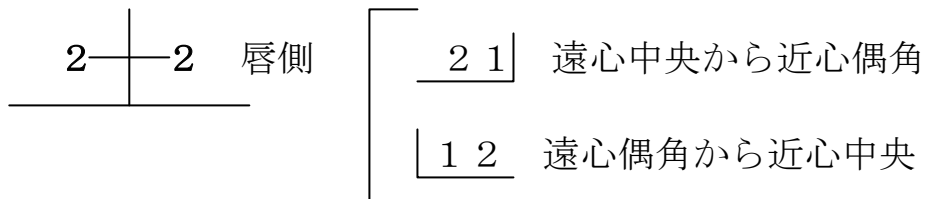
ニュートラルのポジションから手の甲を内転させながら手首の内側を絞り込む

ツイスト（ひねり）を加えることで根面の凹へのスケーラーの刃のフィット感が非常によく感じ取れる

## ☆ ドロッピングモーション

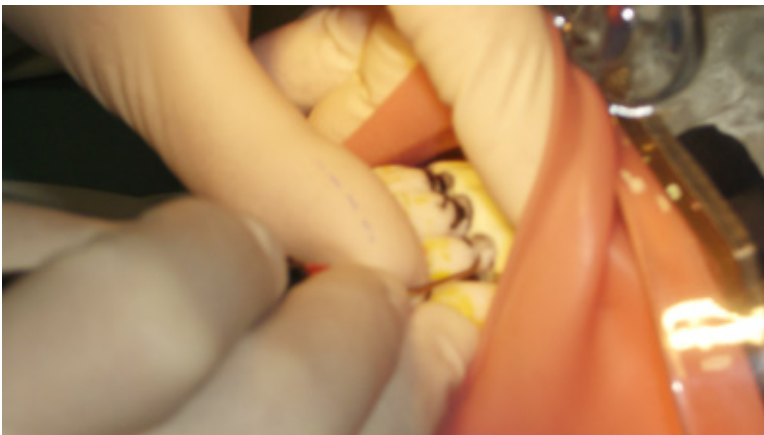
肘と腕の筋肉の動きに連動して手首を落としていく  
 肘をひもで引っ張られているようなイメージで動かす  
 前腕の筋肉も一体に使う  
 腕全体でドロッピングしなければならない

### 【マネキン実習】



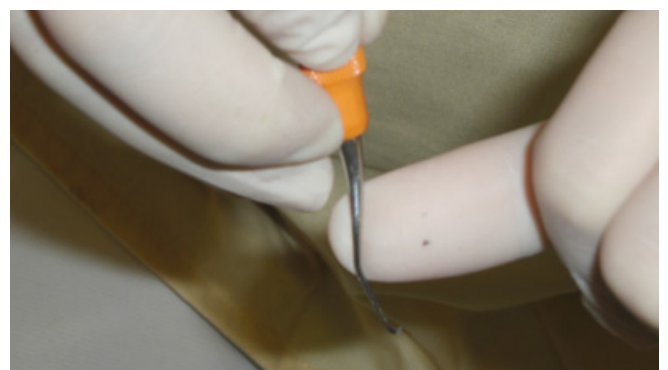
- ・スケーラー : G# 1 1
- ・ポジション : フロント

- ・左手は人差し指で口唇排除



- ・親指はスケーラーの補助

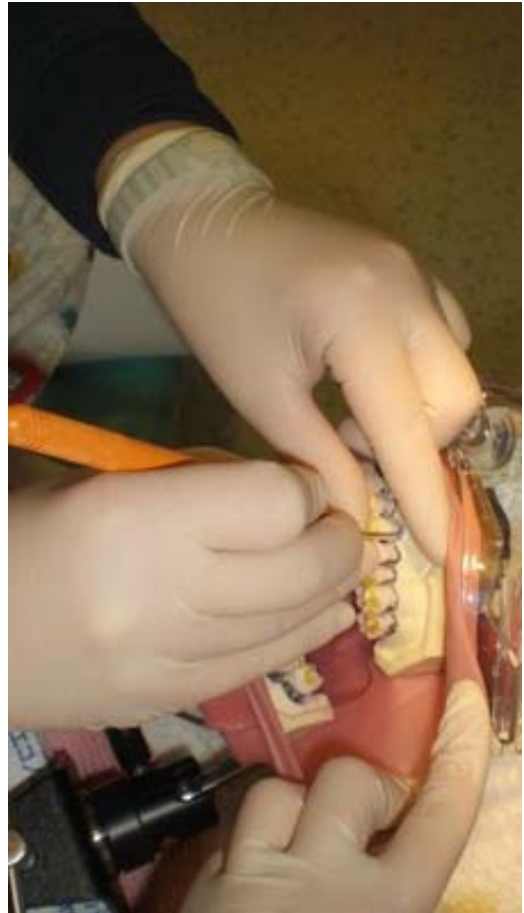
親指の頭がしらにスケーラーの第2シャンクをのせる



○印の線と切端のラインを合わせて親指は固定

1. 親指の頭がしらにスケーラーの第2シャンクを乗せる
2. スケーラー挿入と同時に固定指を補助である左親指のすぐ横に固定

この時、**第1シャンクが歯軸と平行**である



3. 近心隅角近くまで行くと左親指の上にレストの位置を変える  
左親指の上に変えることで第1シャンクが歯軸と平行になる





#### 4. 近心中央になってくると手の甲を段々とかえしていく

近心中央に行くにつれて脇がだんだんとあくようになってくる



第一シャンクが歯軸と平行になるように固定点を置く  
手の甲を返すのが大切

#### <考察・感想>

今日からマネキン実習がはいり、また講義なんかとは違った緊張感ができました。

手の甲を返すのを忘れてしまったり、第一シャンクが歯軸と平行でなかったりと、頭では理解していても、1つのことばかりに意識がいつてしまってたなかなか思うように出来ない自分がすごいもどかしかったです。

毎日のトレーニングで自然と出来るようにこれから頑張っていきます。

また、今日の講義を聞いて自分も結構曖昧にしていた部分に対してこれではいけないと本当に思いました。まあこんなもんだろう・・・と希釈のなんとなくでしてしまっていたり、ダメだなとは思っていても、ただ思っているだけという現状だったりともう一度自分のしていることの意味をちゃんと考えていかなければと思います。自分ひとりの問題ではなく医院全体の問題としても取り組んでいかなければならないことおまた今回改めて考えさせられる講義でした。